

激動の世界を照らす燈台

ジャン = マルク・ランヌ

この2年間、私たちの生活や文化で多くのことが保留されていたが、それらは今、ゆっくりと復活しつつある。2020年から2022年にかけてフランスで配給された作品から選りすぐったこのセレクションは、世界的なパンデミックにより1年もの間映画館が閉館を余儀なくされ、その歴史の中でもとりわけ彷徨える時期にあったフランス映画を写し出ていると言えるだろう。製作は中断され、映画館閉館が長引いたため、興業は停止となり、再開されたものの、お蔵入りしていた作品たちは短期間で次々に公開されることになった。2020年代初頭のフランス映画を写し出すこのセレクションには、したがってその奥底にこの時期の歴史が存在している。パンデミックの恐怖、生活の停止、衛生上の制約の重さは、あえて語られることがなくとも作品の中に入り込み、時にはその受容に強い影響を与え、幾つかの作品においてはより目に見える形でフィクションの中に宿っている。

ラブ・コメディ『セヴェヌ山脈のアントワネット』が興行的にも大成功を収めたのは、一回目のロックダウンの解除の日に公開されたことと無関係ではないだろう。同作は、まさに観客たちを驚きとともに魅了した。監督のキャロリーヌ・ヴィニャルは、20年前にたった一本監督しただけで、これまでさほど注目されていなかった。そして主演のロール・カラミーは、これまで作家主義的作品(アラン・ギロディー、ジュスティヌ・トリエ、ギヨーム・ブラック)やテレビ・ドラマ(『エージェント物語』)で注目すべき脇役を演じ、すでにその名を上げていたが、同作で、突如、彼女の疾風のような気質にぴったりのアントワネットという主役を与えられる。ヴァカンスを共に過ごすはずの愛人に振られるも、理性に反して愛を追い求め、試練の道を行くアントワネットは、ロメールの『緑の光線』を想起させる。しかしその繊細な描写やカラミーの見事な演技以上に、同作は、パンデミックが観客から奪ったもの、すなわち広い空間、屋外、焼けつくような太陽の光、肌を撫でる風のそよぎを取り戻させたのだ。

外出禁止から解き放ってくれたこの偉大な作品とは逆に、日常生活におけるパンデミックの存在をフィクションに組み込むことに成功しているのが、クレール・ドゥニの『愛と激しさをもって』とジュリー・ルクストレ&エマニュエル・マールの『そんなの気にしない』の二本である。マスクと窒息状態、パンデミックの大惨事に突き当たる人々の動き、空気が不足し、重くなっていく様子がこの二本のフィクションに漂っている。

『そんなの気にしない』は長編デビュー作であるが、この奇妙な2年の間に多くの監督が期待以上のデビュー作で際立った存在感を示している。その一本が『マイ・ベスト・パート』だ。俳優ニコラ・モーリーのこの初監督作品は、オートフィクションという私的かつ親密な作品の系譜にある。危機に瀕した若い俳優の実存と愛の彷徨を、繊細かつコミカルに描いている。こうした一人称の映画とは対照的に、20世紀初頭に実在した十代の犯罪者の精神世界を検証したのが、卓越した演出力をみせるヴァンサン・ル・

ポールの驚くべきデビュー作『ブリュノ・レダル、ある殺人者の告白』である。『恋するアナイス』とはいえば、ふたりの間で揺れ動く主人公アナイスのように、親密なる愛の告白とマリヴォーの純粋なる恋愛喜劇の間で揺れ動いている。しかしそのメカニズムを現代のフェミニズムやジェンダーの流動性に照らして読み直しをしている点がこの作品の魅力である。

私たちを熱狂させるこれら監督デビュー作に、晩年にさしかかる作家の崇高なる作品が返答してみせる。ポール・ヴェッキアリの『愛の疑問』である。90歳を越えてヴェッキアリはもっとも大胆で自由な映画を生み出した。映画産業の辺境で、わずかな資金で製作されながらも、同作は演出そのものが芸術の真髄のようなものに触れ、映画と亡霊たちの表裏一体の関係をもっともシンプルに語ってみせる。

始まりの勢いと終わりの華やかさの間で、新たな変容を作品の過程でみせてくれる作品たちも存在する。たとえばお笑い芸人でもあるヴァレリー・ルメルシエがシリーズ・ディオンの役に挑み、現代の神話を滑稽かつ感動的に語ってみせた『ヴォイス・オブ・ラブ』。あるいは多作なカンタン・デュビューは、彼のもっとも贅沢で楽しい作品のひとつ『マンディビュル 2人の男と巨大なハエ』を、ブリュノ・デュモンは笑劇の力を探求し続け、熱狂させる『フランス』を、一方セルジュ・ボゾン『ドン・ジュアン』で彼のフィルモグラフィーの中でもっとも素朴で感動的な作品を生み出すことに成功している。また、この三作において現在もっとも注目されているフランス女優三人の軌跡を追うこともできる。アデル・エグザルコプロス(『そんなの気にしない』にも出演)、レア・セドゥ、そしてヴィルジニー・エフィラである。

女優、そのオーラは、つねにフランス映画の強力な触媒のひとつであった。デルフィーヌ・セリグは、まさに映画の趨勢を変えたひとりである。新たな思いつきや発明、そしてリスクを好む彼女らは、映画の形式においてもっとも過激な変革を可能にした(『去年マリエンバートで』、『インディア・ソング』、『ジャンヌ・ディエルマン』など)。また、その勇気と並外れた政治的先見性によって、自ら監督した数本の作品や、公の場での発言において、男性優位の社会に挑戦したパイオニアでもある。死後30年以上経った現在、彼女の存在がこれほど同時代的に感じられることはないだろう。多くの危険、しかしまた解放の約束に満ちたこの激動の時代を、デルフィーヌ・セリグはまるで燈台のように照らしくれている。

ジャン = マルク・ランヌ Jean-Marc Lalanne

1967年生まれ。90年代半ばから「カイエ・デュ・シネマ」で批評活動を行い、日刊紙「リベラシオン」の文化欄チーフを務めた後、2001年にふたたび「カイエ・デュ・シネマ」に戻り、編集長を務める。2003年から人気カルチャー雑誌「レ・ザンロキュプティブル(通称:レザンロック)」の編集長を務めている。フランス国営ラジオ放送フランス・キュルチュールの人気映画討論番組「マスク・エ・ラ・プリューム」をはじめとしてラジオ番組に出演したり、シネマテーク・フランスーズで講演を行うなど、書く、語る、その両方でフランスの映画批評を牽引し続けている。主な著書:『コクトーと映画、無秩序』(共著、2006年)、『ガス・ヴァン・サント』(共著、2009年)など、すべてカイエ・デュ・シネマ出版社

France de Bruno Dumont

上映スケジュール Calendriera

10.1 [土]	15:30	恋するアナイス Les Amours d'Anaïs (98分) 上映前、坂本安美による作品紹介あり
	17:40	セヴェヌ山脈のアントワネット Antoinette dans les Cévennes (98分)
10.2 [日]	15:30	マイ・ベスト・パート Çaçon chiffon (100分)
	17:30	ブリュノ・レダル、ある殺人者の告白 Bruno Reidal, confession d'un meurtrier (101分) アフタートーク ゲスト:三宅唱
10.3 [月]	15:40	セヴェヌ山脈のアントワネット Antoinette dans les Cévennes (98分)
	18:00	恋するアナイス Les Amours d'Anaïs (98分)
10.4 [火]	15:40	セヴェヌ山脈のアントワネット Antoinette dans les Cévennes (98分)
	18:00	去年マリエンバートで L'Année dernière à Marienbad (94分)
10.5 [水]	15:30	ヴォイス・オブ・ラブ Aline (126分)
	18:00	恋するアナイス Les Amours d'Anaïs (98分)
10.6 [木]	15:40	マイ・ベスト・パート Çaçon chiffon (100分)
	18:00	ブリュノ・レダル、ある殺人者の告白 Bruno Reidal, confession d'un meurtrier (101分)
10.7 [金]	15:40	去年マリエンバートで L'Année dernière à Marienbad (94分)
	18:00	マイ・ベスト・パート Çaçon chiffon (100分)
10.8 [土]	15:30	マンディビュル 2人の男と巨大なハエ Mandibules (77分)
	17:20	赤い唇 Les Lèvres rouges (100分)
10.9 [日]	15:30	〈こども上映会〉ロバと王女 La Peau d'âne (89分) *
	17:30	デルフィーヌとキャロル Delphine et Carole, insoumises (68分)
10.10 [月・祝]	15:30	《ジャンヌ・ディエルマン》をめぐって Autour de « Jeanne Dielman » (78分)
	17:05	フランス France (134分) アフタートーク ゲスト:月永理絵
10.11 [火]	16:00	マンディビュル 2人の男と巨大なハエ Mandibules (77分)
	18:00	赤い唇 Les Lèvres rouges (100分)
10.12 [水]	15:30	フランス France (134分)

第4回 映画批評月間〜フランス映画の現在をめぐって〜

主催:アンスティチュ・フランセ日本 | 共催:ユーロスペース | 助成:アンスティチュ・フランセパリ本部 | アンスティチュ・フランセ日本 映画プログラム オフィシャル・パートナー:笹川日仏財団、TV5 MONDE | 特別協力:Bartlab、レザンロキュプティブル、一般社団法人コミュニティシネマセンター、tapetum works、ユニフランス | フィルム提供及び協力:アダグソニア、ビー・フォー・フィルム、セテラ・インターナショナル、シャラード、レ・フィルム・デュ・ロザンジュ、インディ・セールズ、ハビネットファントム・スタジオ、マーメイドフィルム、MK2、タマサ・ディストリビューション、ザ・ベスト・サーヴィシング・エヴェー、ザジフィルムズ、WTFilms、ワイルド・パンチ

4^{ème} Mois de la critique - nouveaux rendez-vous du cinéma français
organisé par l'Institut français du Japon | co-organisé par Eurospace | avec le soutien de: Institut français, les Inrockuptibles, Fondation Sasakawa, Japan Community Cinema Center, TV5 MONDE, tapetum works,Unifrance | merci à Adansonia, BartLab, Be For Films, Cetera International, Charades, les Films du Losange, Indie Sales, Happinet Phantom Studios, Mermaid Films, MK2, Tamasa Distribution, The Best Servicing Ever, Zazie Films, Inc., WTFilms, Willd Bunch.

INSTITUT
FRANÇAIS

ユーロスペース
EUROSPACE

FONDAZIONE
SASAKAWA

TV5
MONDE

UNIFRANCE
All the accents of creativity

会場:ユーロスペース
東京都渋谷区円山町1-5 KINOHAUS 3F | Tel.03-3461-0211

10.12 [水]	18:00	インディア・ソング India Song (120分)
10.13 [木]	15:30	《ジャンヌ・ディエルマン》をめぐって Autour de « Jeanne Dielman » (78分)
	17:30	フランス France (134分)
10.14 [金]	13:00	ヴォイス・オブ・ラブ Aline (126分) 上映前、ジャン = マルク・ランヌによる作品紹介あり (通訳付)
	15:45	ドン・ジュアン Don Juan (100分) 上映前、ジャン = マルク・ランヌによる作品紹介あり (通訳付)
	18:00	愛と激しさをもって Avec amour et acharnement (116分) アフタートーク ゲスト:黒沢清、ジャン = マルク・ランヌ (通訳付)
10.15 [土]	13:00	〈こども上映会〉ロバと王女 La Peau d'âne (89分) *
	15:10	ミュリエル Muriel ou le temps d'un retour (118分) 上映前、ジャン = マルク・ランヌによる作品紹介あり (通訳付)
	18:00	デルフィーヌとキャロル Delphine et Carole, insoumises (68分) 上映後、ジャン = マルク・ランヌによるレクチャーあり (通訳付)
10.16 [日]	15:30	インディア・ソング India Song (120分)
	18:00	愛の疑問 Un soupçon d'amour (92分)
10.17 [月]	15:30	愛の疑問 Un soupçon d'amour (92分)
	17:30	フランス France (134分)
10.18 [火]	15:30	ミュリエル Muriel ou le temps d'un retour (118分)
	18:00	ドン・ジュアン Don Juan (100分)
10.19 [水]	15:30	そんなの気にしない Rien à foutre (115分)
	18:00	マンディビュル 2人の男と巨大なハエ Mandibules (77分)
10.20 [木]	16:00	デルフィーヌとキャロル Delphine et Carole, insoumises (68分)
	18:00	そんなの気にしない Rien à foutre (115分)
10.21 [金]	15:30	そんなの気にしない Rien à foutre (115分)
	18:00	愛と激しさをもって Avec amour et acharnement (116分)
一般1500円/学生・会員・シニア1200円 ■ * 〈こども上映会〉「ロバと王女」上映のみ 高校生以下500円 ■ 開場時間:10分前 全席指定席 ■ チケット販売時間:各上映日 の3日前深夜0時よりユーロスペース公式HP (www.eurospace.co.jp) および同日開場 時よりユーロスペース劇場窓口にて販売いたします		

10 mois de la critique

映画批評月間

フランス映画の現在をめぐって

Nouveaux rendez-vous du cinéma français

10.1 [土] → 10.21 [金]

ユーロスペース

du 1 au 21 octobre à Eurospace

企画協力・ゲスト Programme conçu avec

ジャン = マルク・ランヌ 「レザンロキュプティブル」編集長
Jean-Marc LALANNE, rédacteur en chef des Inrockuptibles

ゲスト Invités

黒沢清 (映画監督)
Kiyoshi KUROSAWA

三宅唱 (映画監督)
Sho MIYAKE

月永理絵 (エディター&ライター)
Rie TSUKINAGA

www.institutfrancais.jp/tokyo/

INSTITUT
FRANÇAIS
アンスティチュ・フランセ東京
Japan - Tokyo

vivre
les
cultures

France de Bruno Dumont

Les Inrockuptibles

Best of 20/22



© Rectangle Productions/Gaumont/TF1 Films Production/De Thuille/Pcf
Aline Le Film Inc./Belga

ジャン = マルク・ランヌが選ぶ 2020/2022 ベスト

フランスの映画媒体、批評家、専門家、プログラマーと協力し、最新のフランス映画を選びすぎり、ご紹介する「映画批評月間〜フランス映画の現在をめぐって〜」。第4回目は、フランスの人気カルチャー・マガジン雑誌「レザンロキュプティブル」の編集長ジャン＝マルク・ランヌによるセクションをお届けします。

マイ・ベスト・パート **Garçon chiffon** de Nicolas Maury

[2020年／100分／カラー／フランス]

監督：ニコラ・モーリー 出演：ニコラ・モーリー、アルノー・ヴァロワ、ナタリー・バイ

30代のジェレミーは、新人俳優として奮闘するもなかなか芽が出ず、私生活では嫉妬深い性格にから恋人との関係がこじれてしまう。パリから故郷のリムーザンの母のもとに戻り、立ち直ろうとするのだが…。ゲイであることを公にし、幅広い役まわりでフランス映画に新風を吹かせている人気俳優N・モーリーの監督デビュー作。母親役を演じるナタリー・バイが作品に豊かな奥行きを与えている。第73回カンヌ国際映画祭カンヌレーベル作品。「誇張しつつも抑制され、大げさであるより綿のようにソフトな本作で、ニコラ・モーリーはその作家性を見事に刻み、そして俳優として最高の演技を見せている」

セヴェンヌ山脈のアントワネット **Antoinette dans les Cévennes** de Caroline Vignal

[2020年／98分／カラー／フランス]

監督：キャロリーヌ・ヴィニャル 出演：ロール・カラミー、バンジャマン・ラヴェルネ

アントワネットは恋人のウラジミールとのロマンチックなヴァカンスを楽しみにしていたのだが、彼は妻子とセヴェンヌ山脈へ。迷わずその地へ向かったアントワネットだが、珍道中に同行することになるのは不機嫌なロバのバトリックだった。ギョーム・ブラックの『女気なし』などコミカルかつ繊細な感情の機微を表現する人気女優ロール・カラミーが主演し、見事セザール賞最優秀女優賞を受賞。「非常に成功しているコメディであり、女性によるあらたなる西部劇といえるだろう」

愛の疑問 **Un soupçon d'amour** de Paul Vecchiali

[2020年／92分／カラー／フランス]

監督：ポール・ヴェックアリ 出演：マリアンヌ・パスレル、ファビエヌ・バーズ、ジャン＝フィリップ・フィマルタン
名女優ジュリエット・ガランは、夫のアンドレをパートナーに、ラシーヌの「アンドロマック」のリハーサルを行うのだが、この役を演じることに深い違和感を覚え、夫の愛人で、友人のイザベルに譲ること。ジュヌヴィエーヴは病気の息子連れ、生まれ故郷の村へと向かう。ヌーヴェルヴァーグと同世代ながら独自の製作体制で、90歳を過ぎた現在も精力的に取り組んでいる巨匠ポール・ヴェックアリによる近年最も美しい作品。「室内劇場と剣幕の科学の間で、これまでのヴェックアリの職人的な映画に忠実に、人生の苦悩から何とか逃避しようとする女優の素晴らしいポートレートを生み出した」

マンディビュル 2人の男と巨大なハエ **Mandibules** de Quentin Dupieux

[2020年／77分／カラー／フランス]

監督：カンタン・デュビュ 出演：ダヴィ・マルセ、グレゴワール・ルディック、アデル・エグザルコプロス

おまけコンビ、ジャン＝ガブとマニユは、車のトランクの中に巨大なハエを見つける。ふたりは金儲けのためにハエを調教しようとするが、そこにセシルという女性が通かり…。プニュエルや70年代のフランス犯罪映画など、様々なジャンルを取り入れ、笑いの中にシュールで不気味な世界の相貌をのぞかせる鬼才デュビュによるファンタジック・コメディ。人気俳優たちのあらたな魅力を引き出すのもデビュー映画の見どころ。ヴェネツィア国際映画祭正式出品作品。

ヴォイス・オブ・ラブ **Aline** de Valérie Lemercier

[2021年／126分／カラー／フランス＝カナダ]

監督：ヴァレリー・ルメルシエ 出演：ヴァレリー・ルメルシエ、シルヴァン・マルセル、ダニエル・フィショウ

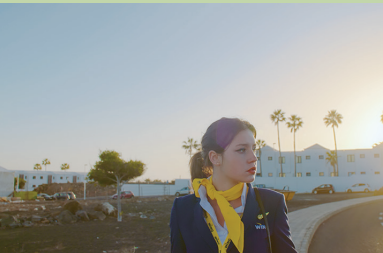
フランスで絶大な人気を誇るお笑い芸人、女優、そして監督とマルチで活躍するヴァレリー・ルメルシエが監督・脚本・主演を務め、世界的歌姫セリーヌ・ディオンとの半生をモチーフに描いた音楽映画。第74回カンヌ国際映画祭正式招待作品。「ルメルシエは、このジャンルの忍従すべき（そして多少恥ずかしくもある）人工性に対して、賢沢で、ややパロディックともいえる人工性を導入してみせる。“アリーヌ”とは、ヴァレリーが夢見るセリーヌであり、セリーヌによって見えてくるヴァレリーであり、また別の何か、創造された存在、純粋な映画のファンタジーであるだろう」



LADA 52 R © Los Films Pollicás Année Zéro



© R. Arpajou



恋するアナイス **Les Amours d'Anaïs** de Charline Bourgeois-Tacquet

[2021年／98分／カラー／フランス]

監督：シャルリーヌ・ブルジョワ＝タケ

出演：アナイス・ドゥム＝スティエ、ヴァレリア・ブルーニ＝テデスキ、ドゥニ・ボダリデス

「16世紀における情熱」についての博論を書き終えないまま、将来も恋愛も見通しが立たないでいる30歳のアナイス。ある日アナイスはダニエルという年配の男性とつき合い始めるが、しだいにダニエルの伴侶であるエミリーに魅了されていく。第74回カンヌ国際映画祭批評家週間で注目を集めたC・ブルジョワ＝タケの長編デビュー作。自然の中で解放され、しだいに惹かれ合う二人の女性たちが繊細かつ官能的に描かれている。「愛が科学であるならば、才能溢れるシャルリーヌ・ブルジョワ＝タケは、知的なる愛についての学びの映画を、不純で喜びあふれる方法で揺り動かし、再生させる独自の方式を完成させている」

フランス **France** de Bruno Dumont

[2021年／134分／カラー／フランス＝ドイツ＝イタリア＝ベルギー]

監督：ブリュノ・デュモン 出演：レア・セドゥ、バンジャマン・ビエロ、ユリアーネ・ケーラー

スター・ニュースキャスター、フランスはある事件をきっかけに、世界の「不幸」により目を向けようとするのだが…。ブリュノ・デュモン最新作、第74回カンヌ国際映画祭コンペ部門出品。一人の女性の肖像であると同時に、フランスという国、メディアというシステムの肖像。「普段はプロの俳優を使うことを警戒しているデュモンが、不実なる女、フランスを演じるのに自分が何者であるかを十分に自覚しているレア・セドゥを選んだのは偶然ではないだろう。外見と内面の葛藤、壮大なスケイクルを、登場人物と女優が共にそれを観察している（…）そしてフェイクニュースで影れあがった現実につし亀裂が入り始める」

そんなの気にしない **Rien à foutre** d'Emmanuel Marre et Julie Lecoustre

[2022年／115分／カラー／フランス＝ベルギー]

監督：エマニュエル・マール&ジュリー・ルクストル

出演：アデル・エグザルコプロス、アレクサンドル・ペリエ、マール＝タキン

格安航空会社の客室乗務員、26歳になるカサンドラは、マッチングアプリ、ティンダーのニックネーム「カルベ・ディエム（今を楽しめ）」に忠実に、フライトからフライトへ、パーティーからパーティーへ、しがらみのない毎日を生きている。しかし会社のプレッシャーが増すにつれ、カサンドラはしだいに自分を見失っていく…。『マンディビュル』に引き続き、『アデル、ブルーな熱い色』のアデル・エグザルコプロスが素晴らしい演技を見せている。第75回カンヌ国際映画祭批評家週間出品作品。「ジュリー・ルクストルとエマニュエル・マールは、即興と綿密な再現を織り交ぜた演出で、ジェネレーションYの感動的な物語を描き出すことに成功している」

ブリュノ・レダル、ある殺人者の告白

Bruno Reidal, confession d'un meurtrier de Vincent Le Port

[2022年／101分／カラー／フランス]

監督：ヴァンサン・ル・ポール 出演：ディミトリ・ドレ、ジャン＝リュック・ヴァンサン、ロマン＝ヴィルデュ

1905年9月1日、フランスのカンタル地方の農民で、神学校に通う17歳の青年が12歳の子供を殺害した容疑で逮捕される。医師はその行動を理解するために、幼少期から犯行当日までの人生について青年に尋ねていく。実話を基にしたヴァンサン・ル・ポールの長編デビュー作で第75回カンヌ映画祭批評家週間にて大絶賛された。「犯罪の恐ろしさの裏に、孤独やフラストレーション、タブー、社会環境、時代から受けた苦痛を抱えた子供の存在があり、本作はすべてを説明したり正当化しようとせず、彼の魂の揺れを見せようとしています」——監督の言葉

愛と激しさをもって **Avec amour et acharnement** de Claire Denis

[2022年／116分／カラー／フランス]

監督：クレール・ドゥニ

出演：ジュリエット・ベリッシュ、ヴァンサン・ランドン、グレゴワール・コラン、マティ・ディオップ、ビュル・オジエ

10年近く共に暮らすサラとジャンは情熱的に愛し合っている。ある朝、サラはかつての恋人フランソワと偶然再会する。フランソワはサラを親友であるジャンに紹介し、彼女がそのジャンのために別れを告げた人物だった…。第72回ベルリン映画祭最優秀監督賞受賞。「演出面で本当に素晴らしい映画だ。たとえば驚くべきファーストショット。スチュアート・A・ステイブルズのギター、海の残響、シンプルな会話シーンの不協和なカット、何度も唱えられる言葉、すべてがこの脅威にさらされた愛の物語に驚くべき表現力を与えるのに貢献している。そしてなにより、役者たちの力が最大限に発揮されている」

ドン・ジュアン **Don Juan** de Serge Bozon

[2022年／100分／カラー／フランス]

監督：セルジュ・ボゾン 出演：ヴィルジニー・エフィラ、タハール・ラヒム

2022年、ドン・ジュアンはもはやすべての女性を誘惑する男ではなく、自分を捨てた一人の女性に執着する男になっていた…。『タゲレオタイプ』のタハール・ラヒムが『めまい』のスコッティのように愛する女性のイメージに取り憑かれた男を演じるミュージカル。第75回カンヌ国際映画祭プレミア部門出品作品。「セルジュ・ボゾンは、彼の映画のいつもの奇抜さを軽減させ、それを細かい振り付けの身ぶりの中へと封じ込める。その結果、哀調を帯びたダンスのムーブメントを全編に渡り生み出し、出演者が愛を告白し合う歌声が裏切らない心からの美しさを醸し出している」

Rétrospective Delphine Seyrig

去年マリエンバートで

L'Année dernière à Marienbad
d'Alain Resnais

[1961年／94分／モノクロ／フランス＝イタリア]

監督：アラン・レネ

出演：ジョルジョ・アルベルタッツィ、サッシャ・ピトエフ

パロディ調の宮殿のようなホテル、男はひとりの女に、去年マリエンバートで出会い、愛し合ったと語りかける。1959年ニューヨークで舞台に立っていたセイリグに魅了されたレネは当初、ジャン・レイ原作の『怪盗クモ団』を映画化し、セイリグに犯罪組織（クモ団）の首領の役を検討。予算の問題などから企画が変更し、アラン・ロブ＝グリエによる脚本、ココ・シャネルの衣装で映画史に残る本作、忘れがたいヒロインが誕生。第22回ヴェネツィア国際映画祭金獅子賞受賞し大成功を取めた本作によってセイリグは国際的な名声を得た。

ミュリエル

Muriel ou le temps d'un retour
d'Alain Resnais

[1963年／118分／カラー／フランス]

監督：アラン・レネ

出演：ジャン＝パティスト・チェーレ、ジャン＝ピエール・ケリアン、ニタ・クライン

1962年9月アルジェリア戦争から帰還した義理の息子と暮らす古美術商のエレーヌのもとに、かつての恋人アルフォンスが姪と称する若い女と訪ねてくる。再びレネと組んだ本作で、セリグは一転、初老の女性に挑んだ。『「ミュリエル」には10、20の主題がある。レネや（原作者の）ジャン＝ケイヨールさえ考えもしなかったテーマさえ存在している。それが偉大な映画の力である」——アンリ・ラングロワ

ロバと王女

La Peau d'âne de Jacques Demy

[1970年／89分／カラー／フランス]

監督：ジャック・ドゥミ 出演：カトリヌ・ドヌーヴ、ジャック・ベラン、ジャン＝マレー

リラの妖精の計らいで、王女はロバの皮を纏い、父である王のもとから逃げ出し森に身を隠す。シャルル・ペローの童話『ロバの皮』を映画化したミュージカル。かねてからドゥミが出演を切望していたセイリグは、紫のドレスに身を包み、茶目っ気と気品、知性を兼ね備えた妖精を魅惑的に演じ、甘いしゃがれた歌声も披露してくれる。

赤い唇

Les Lèvres rouge

[1971年／100分／カラー／ベルギー＝フランス＝ドイツ]

監督：ハリー・クメール 出演：ダニエル・ウィメ、ジョン＝カーレン、アンドレア・ラウ

デルフィーヌ・セイリグ特集

アラン・レネのミューズ、60年代の演劇界の女王であり、トリュフォーやドゥミからも賛美されたデルフィーヌ・セイリグ（1932-1990）はその名声の絶頂期であった70年代にフェミニズムの闘いに身を投じ、新しい形式やヴィジョン、テーマを歓迎する女性監督たちと共に仕事しています。当時25歳のシャンタル・アケルマンと傑作『ジャンヌ・ディエルマン』を生み出し、マルグリット・デュラスからは「フランスで、いやおそらく世界で最も偉大な女優」と評されました。自分のイメージを壊すことを恐れず、変化し続けていった自由な女性デルフィーヌ・セイリグのフィルモグラフィーを辿ります。



*出演リストはデルフィーヌ・セイリグ以外を記載